

「気になる子ども」「気になる保護者」の理解と支援 子育て支援者と保育者の専門性に着目して Understanding of and Support for “Children of Concern” “Parents of Concern”: with a Focus on the Expertise of Child-rearing Supporters and Nursery Teachers

金山 美和子
Miwako KANAYAMA

要旨

本研究は、子育て支援者が「気になる子ども」「気になる保護者」をどのように理解し支援しているのか、保育者との相違点は何かを、両者の専門性に着目し明らかにすることを目的として質問紙調査を実施した。調査1では、支援者が「気になる子ども」の特徴は「多動・落ち着きがない」「こだわりが強い」などで、具体的な支援として「わかりやすい言葉で伝える」「他の職員に相談する」ことが示された。「気になる保護者」の特徴は「子どもとのかかわりが不器用である」「いつも疲れている様子である」などで、具体的な支援として「保護者の話をよく聞く」「保護者とのコミュニケーションを図る」ことが示された。調査2では、支援者と保育者の比較により、「気になる子ども」の特徴において低年齢児を理解するうえでも捉えやすい項目においては該当有群が支援者に多く、発達過程の特徴の項目においては保育者に多いことが明らかになった。具体的な支援では「施設全体で支援のあり方を考える」が支援者に、「保護者に実際の子どもの姿を見て理解してもらう」が保育者に多かった。「気になる保護者」の特徴では、保護者の養育態度、園や他保護者との関係性の項目において該当有群が保育者に多く、保護者自身の様子や保護者と他の保護者とのかかわりに関する項目では支援者に多かった。具体的な支援として、保護者を受容する項目、必要な専門機関につなぐ項目においては支援者に多い結果であることが明らかになった。

キーワード：気になる子ども、保護者支援、保育者、子育て支援者、専門性

1. 問題と目的

2008年に改定された保育所保育指針は、第1章総則において保育所の役割として「(3) 保育所は、入所する子どもを保育するとともに、家庭や地域の様々な社会資源との連携を図りながら、入所する子どもの保護者に対する支援及び、地域の子育て家庭に対する支援を行う役割を担うものである。」と記されている¹⁾。総則に示すことにより、保育所に求められている「子どもを健やかに育てること」と、「子どもの保護者とその家庭を支援すること」の2つの役割がさらに明確化された。加えて第6章保護者に対する支援では、1. 保育所における保護者に対する支援の基本、2. 保育所に入所している子どもの保護者に対する支援、3. 地域における子育て支援として詳細に記されている²⁾。

また、幼稚園においても、1998年12月に改訂された幼稚園教育要領に「幼稚園の運営に当たっては、子育ての支援のために地域の人々に施設や機能を開放して、幼児教育に関する相談に応じるなど、地域の幼児教育のセンターとしての役割を果たすよう努めること。」と、子育て支援機能の役割が示された³⁾。2008年の幼稚園教育要領改訂においては、第1章総則の第3に「幼稚園の目的の達成に資するため、幼児の生活全体が豊かなものとなるよう家庭や地域における幼児期の教育の支援に努めること」と明記されている⁴⁾。

このように保育者には、地域における子育て支援の担い手としての役割も期待され、また、在園児の家庭を支えることも子どもの育ちを支えることと同様に重要な役割となった。

渡辺(2009)は、子ども家庭福祉という観点に立てば、子どもだけを見るのではなく、家族全体を視

野に入れて、家庭生活に関与する人々や組織による支援を総合的に捉えることが必要となると述べている⁵⁾。

しかし、保育者による保護者支援には様々な課題があることを示す研究が近年、数多く報告されている。大豆生田（2008）は、公立・私立の幼稚園、保育所の保育者を対象にアンケート調査を実施し、保育所・幼稚園とも「保護者とのかかわりでは悩みが多い」こと、保育者は「生活習慣の欠如が現代の保護者の大きな問題と捉えている」こと等を明らかにし、保護者とのかかわりが現代の保育における大きな課題であると指摘している⁶⁾。

また、保護者支援に関する研究はその多くが、気になる子どもや発達障害の傾向がある子ども、発達障害児への支援に関する研究の一環として報告されており、鑑ら（2005）⁷⁾、磯野ら（2011）⁸⁾、白石（2014）⁹⁾、渡辺ら（2014）¹⁰⁾の研究からは、気になる子どもの支援に伴う保護者支援において保育者が対応に苦慮する実態が報告されている。

林ら（2010）が行った、幼稚園・保育所の園長73名に対する調査では、気になる保護者がいるとの回答は60%で、気になる保護者の内容としては生活習慣の問題、経済的・時間的余裕のなさ、子育てへの自信のなさ、精神面の問題など保護者自身の課題もあった¹¹⁾。木曾（2014）は、保育士607名を対象とした調査により発達障害の傾向がある子どもの保育に困難を感じている保育士は80.7%、その保護者支援に困難を感じている保育士は65.7%であったと報告している¹²⁾。また、久保山ら（2009）は、幼稚園や保育所の保育者が「気になる子ども」という言葉を使うのは、子どもが乳幼児であるため、障害かもしれないが診断がついていない場合や、子どもが示す気になる行動が障害によるものか、環境のためなのかがわかりにくい場合が多く、当然「気になる」という言葉で表現される内容は保育者によって異なる¹³⁾ことを指摘している。

このように、先行研究においては、幼稚園・保育所における保育者が行う保護者支援についての検討がなされてきたが、地域の子育て家庭に向けた保護者支援の重要性が顕在化するなかで、子育て支援において、気になる子どもや保護者をどのように理解し支援するか検討はまだ十分には行われていない。

そこで、本研究は、支援者が「気になる子ども」「気になる保護者」をどのように理解し支援しているのか、保育者による理解と支援との相違点は何かを両者の専門性に着目し明らかにすることを目的とする。具体的には、N県A市、B市、C市の地域子

育て支援拠点職員、保育所、幼稚園に勤務する保育者を対象とした質問紙調査を実施する。支援者にとって「気になる子ども」「気になる保護者」の特徴と具体的支援の実態を明らかにするとともに、支援者と保育者における「気になる子ども」「気になる保護者」の特徴や具体的支援の相違点を探ることとする。

なお、本研究における子育て支援者は、地域子育て支援拠点に勤務する職員を示し、以後「支援者」と表記する。また、本研究における保育者は、保育士と幼稚園教諭を示すものである。

Ⅱ. 調査Ⅰ

1. 調査の概要

調査Ⅰでは、地域子育て支援拠点の職員を対象に質問紙調査を行い、支援者が「気になる子ども」「気になる保護者」の特徴と実施している具体的支援について明らかにすることを目的とした。

(1) 調査方法

質問紙調査による。

(2) 調査対象

A市、B市、C市の地域子育て支援拠点46か所に勤務する子育て支援者を対象とした。

(3) 調査時期

A市は2014年8月上旬～8月中旬に実施。

B市、C市は2015年5月上旬～下旬に実施。

(4) 調査項目

本稿で結果を示す項目は以下の5項目である。①基本属性、②拠点勤務年数、③これまでの勤務歴、④気になる子どもの特徴に関する項目、⑤気になる子どもに対する支援に関する項目、⑥気になる保護者の特徴に関する項目、⑦気になる保護者に対する支援に関する項目である。④、⑤の項目は、上野ら（2010）¹⁴⁾の文献を参考にしながら作成した。⑥、⑦の項目は、それぞれ久保山ら（2009）、林ら（2010）、木曾（2014）、渡辺ら（2014）の先行研究、星野（2011）¹⁵⁾、司馬（2013）¹⁶⁾の文献を参考にしながら作成した。作成した項目は調査実施前に、子育て支援拠点に勤務する支援者、発達相談担当者、子育て相談担当者に提示し次の観点から意見を求めた。まず、本項目の内容が妥当かどうか、そして項目が支援者に理解し得る適切な表現であるかという点である。得られた意見をふまえ項目を修正し採用した。

(5) 回収状況

調査票配布数：126

回収票数：118（回収率93.7%）

有効回答票数：103

(6) 倫理的配慮

調査の実施にあたり、対象者に調査の目的、任意参加、無記名方式による匿名性の保障、結果の取り扱いについて文書で説明を行った。調査票への回答をもって調査への同意を得たものとみなした。

2. 調査1の結果

(1) 回答者の属性

性別は女性 98.1%、男性 1.9%であった。図1に示すとおり、年齢は29歳以下が3.9%、30～39歳が18.4%、40～49歳が43.7%、50～59歳が26.2%、60歳以上が7.8%であった。男性の比率が僅少であることから本調査においては性別ごとの分析は行わないこととする。

図2に示したとおり、地域子育て支援拠点の勤務年数は1年未満が28.7%、1～2年が19.8%、3～4年が24.8%、5年以上が26.7%であった。

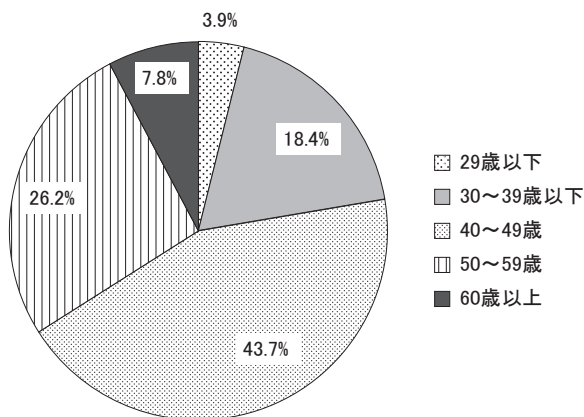


図1 回答者年齢

注. 回答者数は103である

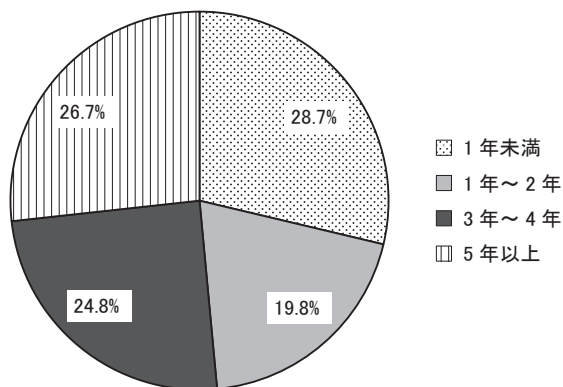


図2 回答者拠点勤務年数

注. 回答者数は103である

これまでの勤務歴として、「保育所」、「幼稚園」、「認定こども園」、「支援センター・子育てひろば等」、「学童保育・放課後児童クラブ」、「福祉施設」、「その他」の項目において複数回答可で回答を求めたところ、「保育所」との回答数が最も多く回答者の60.2%が保育所の勤務歴を有していた。次に「子育て支援センター・子育てひろば等」で30.1%、「幼稚園」が29.1%、「学童保育・放課後児童クラブ」が5.8%、「福祉施設等」が4.9%、「認定こども園」は0.0%であった。

(2) 気になる子どもの特徴

気になる子どもの特徴20項目について5件法で回答されたものを図3に示した。20項目は、「こども自身の特徴」16項目、「拠点での人とのかかわりにおける特徴」4項目に分類される。

1) 子ども自身の特徴

気になる子どもの特徴として「とてもあてはまる」「あてはまる」と回答した比率が高かったのは、「1. 多動・落ち着きがない」で「とてもあてはまる」「あてはまる」を合わせて75.7%、「2. こだわりが強い」が61.2%、「3. 気が散りやすい・集中が続かない」が60.2%であった。「7. かんしゃくが強い」は48.6%、「8. 言葉の遅れがある」は48.5%、「9. 視線が合いにくい」は46.6%と50%に近い比率であった。「11. 表情がない」は41.7%「12. 感覚が過敏である」は36.0%、「13. 乱暴・暴言が多い」は35.9%、「14. 新しいことに不安が強い」は34.9%、「15. 会話が一方的である」が32.0%であった。そして、「16. 知能面での理解の遅れがある」が25.2%、「17. 身辺自立が身につかない」が17.5%、「18. かん黙である」が16.5%、「19. 行動が遅い」が12.6%、「20. 不器用である」が11.7%とこれらの項目はいずれも低い比率となっている。

2) 拠点での人とのかかわりにおける特徴

「とてもあてはまる」「あてはまる」の回答比率が高かったのは、「4. 行動の切り替えがしにくい」が58.3%、「5. 他児とのトラブルが多い」が52.4%、「6. 指示がとおりにくい」が50.4%で半数を超え、「10. 集団に入りにくい」が42.7%であった。

(3) 気になる子どもに対する支援

気になる子どもに対して行っている具体的支援について選択肢を設け該当するものを複数回答可能な形式で質問した結果を図4に示した。

「わかりやすい言葉で伝える」が最も高く67.0%、次いで「他の職員に相談する」が65.0%で半数を超える値であった。「スモールステップで成長を認めほめる」が40.8%であったが、他の項目は40%に

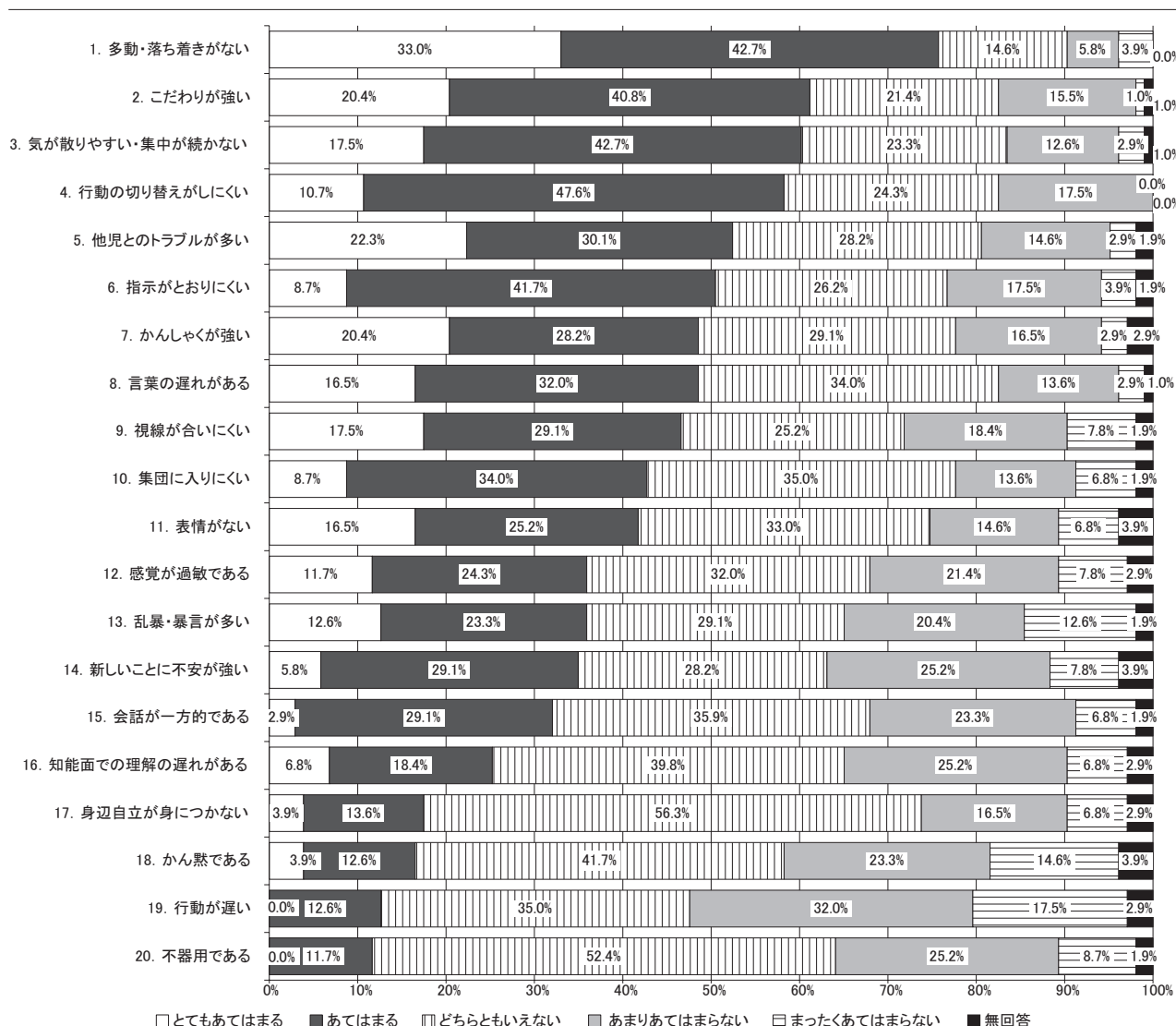


図3 「気になる子ども」の特徴

注. 回答者数は103である

満たない比率であり、「視覚的にわかりやすい教材を使用する」は11.7%、「個別に記録をつける」が9.7%、「保護者に実際に子どもの姿を見て理解してもらう」が3.9%といずれも低い比率であった。

(4) 気になる保護者の特徴

気になる保護者の特徴26項目について5件法で回答されたものを図5に示した。

26項目は、「保護者自身の特徴」13項目、「子どもとのかかわりにおける特徴」7項目、「拠点での人とかかわりにおける特徴」6項目に分類される。

1) 保護者自身の特徴

気になる保護者の特徴として「とてもあてはまる」「あてはまる」との回答比率が高かったのは、「2. いつも疲れている様子である」で「とてもあてはまる」「あてはまる」を合わせて60.2%であった。次に回答比率が高かった項目は「8. 普段から表情

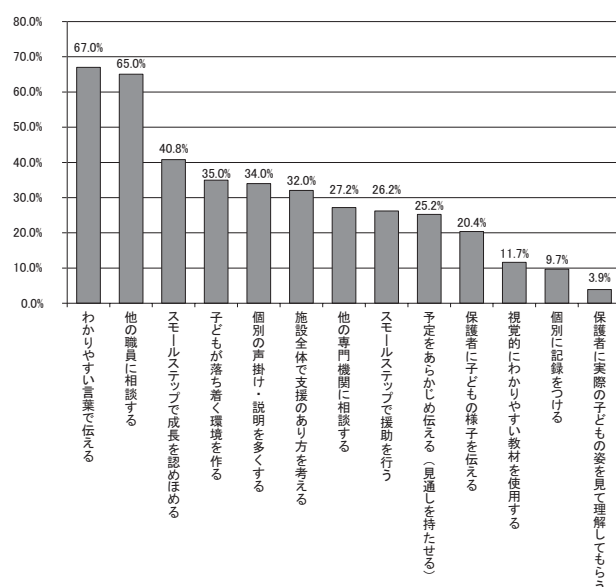


図4 気になる子どもに対する支援

注. 回答者数は103である

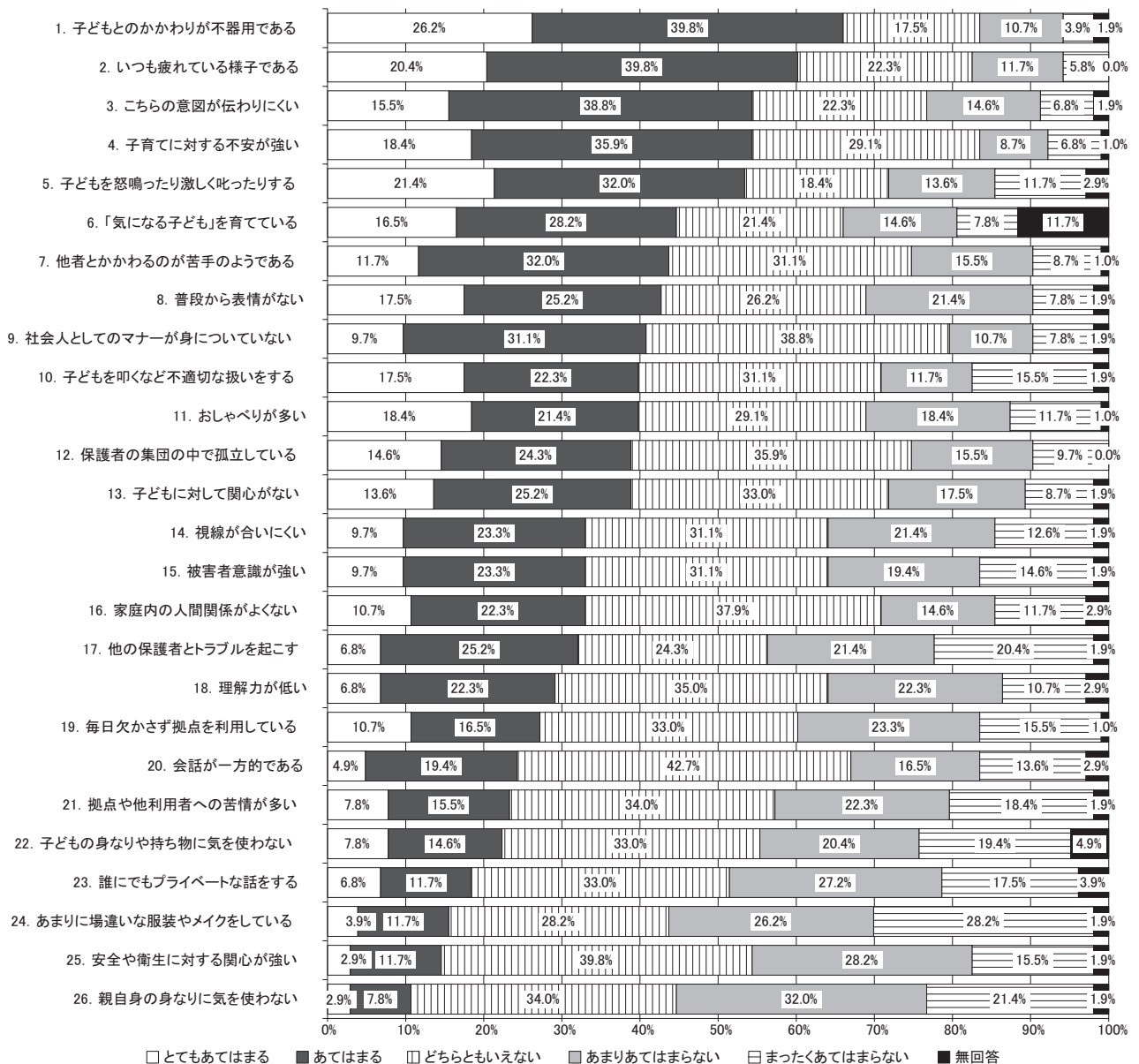


図5 「気になる保護者」の特徴

注. 回答者数は103である

がない」で42.7%、「9. 社会人としてのマナーが身についていない」が40.8%、「11. おしゃべりが多い」が39.8%、「14. 視線が合いにくい」、「15. 被害者意識が強い」、「16. 家庭内の人間関係がよくない」の3項目が同じ比率で33.0%、であった。「18. 理解力が低い」は29.1%、「20. 会話が一方的である」が24.3%、「23. 誰にでもプライベートな話をする」が18.5%、「24. あまりに場違いな服装やメイクをしている」が15.6%、「25. 安全や衛生に対する関心が強い」が14.6%、「26. 親自身の身なりに気をつかわない」が10.7%と低い比率であった。

「あてはまらない」「まったくあてはまらない」を合わせた「あてはまらない」が26項目中最も高い比率であった項目は、「24. あまりに場違いな服装や

メイクをしている」で54.4%、次いで「26. 親自身の身なりに気をつかわない」が53.4%であった。

2) 子どもとのかかわりにおける特徴

「とてもあてはまる」「あてはまる」の回答比率が高かったのは、「1. 子どもとのかかわりが不器用である」が66.0%、「4. 子育てに対する不安が強い」が54.3%、「5. 子どもを怒鳴ったり激しく叱ったりする」が53.4%、「6. 『気になる子ども』を育てている」が44.7%、「10. 子どもを叩くなど不適切な扱いをする」で39.8%、「13. 子どもに対して関心がない」が38.8%、「22. 子どもの身なりや持ち物に気をつかわない」が22.4%であった。

3) 拠点での人とかかわりにおける特徴

「とてもあてはまる」「あてはまる」の回答比率が

最も高かったのは、「3. こちらの意図が伝わりにくい」で54.3%、「7. 他者とかかわるのが苦手なようである」が43.7%、「12. 保護者の集団の中で孤立している」が38.9%、「17. 他の保護者とトラブルを起こす」が32.0%、「19. 毎日欠かさず拠点を利用して」が27.2%、「21. 施設や他利用者への苦情が多い」が23.3%であった。

(5) 気になる保護者に対する支援

気になる保護者に対し行っている具体的支援について選択肢を設け該当するものを複数回答可能な形式で質問したものを図6に示した。

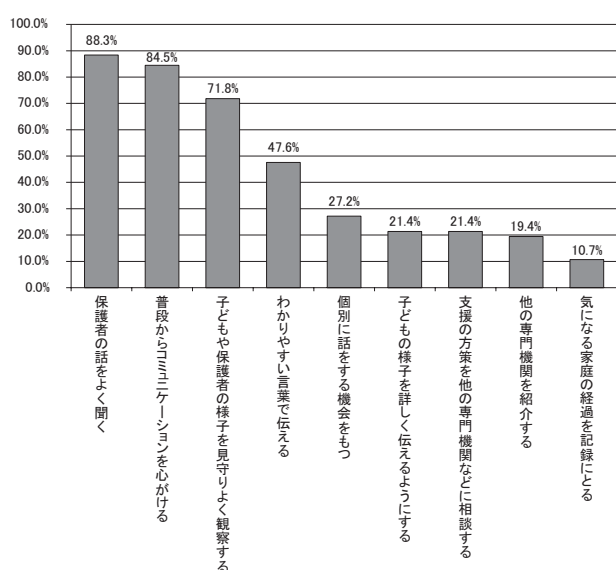


図6 気になる保護者に対する支援

注. 回答者数は103である

「保護者の話をよく聞く」が最も高く88.3%であった。次いで「普段からコミュニケーションを心がける」が84.5%といずれも80%以上の回答比率であった。「子どもや保護者の様子を見守りよく観察する」は71.8%とかなり高い比率であるものの、「わかりやすい言葉で伝える」は47.6%で半数を下回る値であった。他の項目は30%に満たない比率であり、「他の専門機関を紹介する」が19.4%、「気になる家庭の経過を記録にとる」は10.7%と低い比率にとどまっている。

3. 調査1の考察

(1) 「気になる子ども」への理解と支援

「気になる子ども」の特徴については、「多動・落ち着きがない」「こだわりが強い」「気が散りやすい・集中が続かない」「行動の切り替えがしにくい」「他児とのトラブルが多い」「指示がとりにくい」の6項目において「とてもあてはまる」「あてはま

る」の回答比率が50%を超えている。しかし「知能面での理解の遅れがある」「身辺自立が身につかない」「かん黙である」「行動が遅い」「不器用である」の5項目はいずれも低い比率であった。これらの項目は子どもの発達過程に関係するものであり、支援者にとって対象児の年齢がおおむね0歳～3歳未満児であることが影響していると考えられる。

また、地域子育て支援拠点事業実施要綱¹⁷⁾にその基本事業として「1. 子育て親子の交流の場の提供と交流の促進」「2. 子育てに関する相談・援助の実施」「3. 地域の子育て関連情報の提供」「4. 子育て及び子育て支援に関する講習等の実施」と示されているように、支援者に期待される役割が直接子どもを保育することではないことも、支援者が気になる子どもの特徴に影響を与えているものと推察される。

「気になる子ども」への支援においては、「わかりやすい言葉で伝える」「他の職員に相談する」の2項目は70%に近い支援者が行っていると回答したものの、その他の11項目は40%以下の回答率であった。これも、対象児の年齢が低いことや支援者の役割が主に、親子の交流の場の提供と交流の促進であることによるものと思われる。しかし、「気になる子ども」の特徴として、「多動・落ち着きがない」を挙げる支援者が「とてもあてはまる」「あてはまる」を合わせて75.7%であったことからすると、支援者が「多動・落ち着きがない」と捉える子どもが拠点を利用している実態が推察される。そのような子どもに対し「子どもが落ち着く環境を作る」「施設全体で支援のあり方を考える」などの項目は有効な支援であると考えられるが、行っていると回答したのは30%台であった。比率としては多くないが、利用する子どもの実態に応じて拠点の環境構成を行う、拠点全体で気になる子どもの支援のあり方を考えるといった取り組みが行われていることが明らかとなった。

(2) 「気になる保護者」への理解と支援

「気になる保護者」の特徴については、「子どもとのかかわりにおける特徴」の項目において「とてもあてはまる」「あてはまる」の回答比率が比較的高い項目が多く、「保護者自身の特徴」「拠点での人とのかわりにおける特徴」においては回答比率の低い項目が多くみられた。地域子育て支援拠点は保護者と子どもが共に利用する場であり、支援者は日常的に保護者と子どもがかかわる様子を見守り、保護者と子どもに直接的なかかわりを持つものである。そのため、保護者と子どもとのかかわりにおいて気になる特徴と判断される項目が多いのではないかと

思われる。

「誰にでもプライベートな話をする」「あまりに場違いな服装やメイクをしている」「安全や衛生に対する関心が強い」「親自身の身なりに気をつかわない」の項目は、「とてもあてはまる」「あてはまる」の回答比率が10%台であり、「気になる特徴」として捉えられていないことが明らかとなった。これらの項目は支援者にとって保護者個人の趣味や個性と理解されたものと思われる。

本調査において「保護者自身の特徴」として掲出した項目は、知的能力、社会性、コミュニケーションなどにおける困難や家庭不和の可能性を示すものでありこれらの特徴を持つ保護者は子育てや社会生活において問題を抱える場合も少なくないと推察される。星野（2011）は、大人の発達障害について、ADHDやアスペルガー症候群などは、子どもの頃からその兆候はみられるはずであるが気づかれにくく、軽度であるがゆえに見過ごされると述べている¹⁸⁾。また、杉山（2013）は、自閉症スペクトラムの子どもの親の側に、診断基準に満たない軽度の自閉症スペクトラムがしばしば認められること、子どもの側に社会性の発達の遅れがあっても、親の側に自閉症スペクトラム傾向があっても、子ども虐待の高リスクになることを指摘している¹⁹⁾。これらのことから、支援者が保護者自身の特徴に気づくことも保護者支援において重要な課題であるといえよう。

気になる保護者への支援として、「保護者の話をよく聞く」、「普段からコミュニケーションを心がける」、「子どもや保護者の様子を見守りよく観察する」の回答が多くみられたが「支援の方策を他の専門機関などに相談する」「他の専門機関を紹介する」などの支援を行っているとの回答比率は低かった。普段からコミュニケーションを心がけ、保護者の話をよく聞き、様子を見守るといった支援は、通常の業務としてすべての保護者に対して行っている支援を更に丁寧に行うものであるのに対し、支援の方策を他の専門機関に相談する、保護者に他の専門機関を紹介するなどの支援は、「気になる」段階から「支援が必要」とみなされる過程で行われるものであることが影響しているものと思われる。

Ⅲ. 調査2

1. 調査の概要

調査2では、支援者と保育者別に「気になる子ども」「気になる保護者」の特徴と具体的支援を比較し相違点を明らかにすることを目的とした。なおこ

の調査は、特別な配慮を必要とする子どもや家庭への支援に関する総合的な調査の一部として実施されたものである。保育者を対象とした「気になる保護者」の特徴と支援に関する調査結果の一部²⁰⁾は『長野県短期大学紀要第69号』に発表している。保育者にとって「気になる保護者」の特徴としては、「こちらの意図が伝わりにくい」「子どもとのかかわりが不器用である」「行事予定や提出物などを把握していない」など、「保育者及び園とのかかわりにおける特徴」と「子どもとのかかわりにおける特徴」の項目において「とてもあてはまる」「あてはまる」の回答比率が比較的高く、「保護者自身の特徴」の項目においては全般的に低かった。保護者に対しては「普段からコミュニケーションを心がける」「保護者の話をよく聞く」「子どもの様子を詳しく伝えるようにする」といった支援を行っていることが示された。また、保育者を対象とした「気になる子ども」の特徴と支援に関する調査結果の一部は、保育学ゼミ所属学生により発表されている²¹⁾。保育者が「気になる子ども」の特徴として「気が散りやすい・集中が続かない」「指示が通りにくい」「多動・落ち着きがない」「行動の切り替えがしにくい」「こだわりが強い」の5項目において、「とてもあてはまる」「あてはまる」の回答比率が70%を超える高さであった。支援については、子どもへの直接的な支援の項目において過半数の者が行っていると回答しているが、「他の専門機関に相談する」「園全体で支援のあり方を考える」など、他機関や他職員との連携や相談の項目については40%に満たない回答率であった。

本調査では、支援者と保育者別に「気になる子ども」「気になる保護者」の特徴として「とてもあてはまる」又は「あてはまる」とした回答数の比較と、具体的支援の比較を行なうこととする。

守ら（2013）は、幼稚園教諭と保育士を対象に、幼児の「気になる」姿についてアンケート調査を実施し、「気になる」項目に違いは生じるのか、もし違いがあればどのような傾向性があるのかを調査している。集計結果からは、幼稚園教諭と保育士が抱く園児の「気になる」姿に関する50項目の因子尺度得点に有意差はなく、著しい相違は認められなかったことが報告されている²²⁾。

本調査においては、子どもにも保護者にもかわり、必要に応じた支援を行う支援者と、子どもへの直接的な援助を主とする保育者には差異が見られるのではないかと考え、つぎのように予想をたてた。予想1:「気になる子ども」の特徴と具体的支援に

については、支援者と保育者に著しい差異はみられないであろう。

予想2：支援者の方が「気になる保護者」の特徴と具体的な支援として該当有と回答した項目が多いであろう。

(1) 調査方法

質問紙調査による。

(2) 調査対象

A市の公立保育所31か所、公立幼稚園2園に勤務する保育者、A市、B市、C市の地域子育て支援拠点46か所に勤務する子育て支援者を対象とした。

なお公立幼稚園2園の対象者数がごくわずかであること、公立保育所と同一のカリキュラムで保育がおこなわれていることから、本調査においては調査対象を一括して保育者とし、施設ごとの分析は行わないものとする。

(3) 調査時期

A市は2014年8月上旬～8月中旬に実施。

B市、C市は2015年5月上旬～下旬に実施。

(4) 調査項目

本調査で結果を示す項目は以下の4項目である。

①「気になる子ども」の特徴に関する項目、②「気になる子ども」への支援に関する項目、③「気になる保護者」の特徴に関する項目、④「気になる保護者」への支援に関する項目である。

①、②の項目は、上野ら(2010)²³⁾の文献を参考に作成した。③、④の項目は、それぞれ久保山ら(2009)、林ら(2010)、木曾(2014)、渡辺ら(2014)の先行研究、星野(2011)²⁴⁾、司馬(2013)²⁵⁾の文献を参考にしながら作成した。作成した項目は調査実施前に、保育所勤務の保育士、子育て支援拠点に勤務する支援者、発達相談担当者、子育て相談担当者に提示し次の観点から意見を求めた。まず、本項目の内容が妥当かどうか、そして項目が保育者及び支援者に理解し得る適切な表現であるかという点である。得られた意見をふまえ項目を修正し採用した。

(5) 回収状況

調査票配布数：536（保育者410、支援者126）

回収票数：454（回収率84.7%）

有効回答票数：417

(6) 倫理的配慮

調査の実施にあたり、対象者に調査の目的、任意参加、無記名方式による匿名性の保障、結果の取り扱いについて文書で説明を行った。調査票への回答をもって調査への同意を得たものとみなした。

2. 調査2の結果

(1) 気になる子どもの特徴の比較

気になる子どもの特徴として示した20項目において5件法で回答されたもののうち、「とてもあてはまる」「あてはまる」と回答した者を該当有群として、支援者と保育者別の回答数を比較したものを表1に示した。

χ^2 乗検定の結果、1%水準で有意差が見られた。 $(\chi^2(19)=61.546, p<.01)$ さらに残差分析を行った結果、「不器用である」「身辺自立が身につかない」「行動が遅い」の3項目が保育者に多く有意差($p<.01$)があった。また、「知能面での理解の遅れがある」が保育者に多く有意差($p<.05$)があった。「多動・落ち着きがない」「表情がない」「かんしゃくが強い」の3項目は支援者に多く有意差($p<.05$)があった。

表1 気になる子どもの特徴の比較

項目	該当有群	
	支援者	保育者
気が散りやすい・集中が続かない	62	264
多動・落ち着きがない	78	261
指示がとおりにくい	52	263
行動の切り替えがしにくい	60	246
集団に入りにくい	44	185
他児とのトラブルが多い	54	189
乱暴・暴言が多い	37	130
会話が一方的である	33	181
言葉の遅れがある	50	188
知能面での理解の遅れがある	26	178
不器用である	12	158
身辺自立が身につかない	18	162
こだわりが強い	63	229
視線が合いにくい	48	194
表情がない	43	131
行動が遅い	13	137
新しいことに不安が強い	36	182
かんしゃくが強い	50	157
かん黙である	17	87
感覚が敏感である	37	174

(2) 気になる子どもへの支援の比較

気になる子どもに対する支援 13 項目において行っているとの回答数を比較した結果を表 2 に示した。

χ^2 乗検定の結果、1%水準で有意差が見られた。 $(\chi^2 (12) = 81.108, p < .01)$ さらに残差分析を行った結果、「わかりやすい言葉で伝える」「他の職員に相談する」が支援者において、「視覚的にわかりやすい教材を使用する」「個別に記録をつける」が保育者においてそれぞれ多く有意差 ($p < .01$) があった。また、「施設全体で支援のあり方を考える」が支援者において、「保護者に実際の子どもの姿を見て理解してもらう」が保育者においてそれぞれ多く有意差 ($p < .05$) が見られた。「保護者に子どもの様子を伝える」は保育者に多くその差は有意傾向 ($.05 < p < .10$) であった。

表 2 気になる子どもへの支援の比較

項目	該当有群	
	支援者	保育者
わかりやすい言葉で伝える	71	267
スモールステップで援助を行う	27	178
スモールステップで成長を認めほめる	45	216
予定をあらかじめ伝える（見通しを持たせる）	28	207
子どもが落ち着く環境を作る	38	203
視覚的にわかりやすい教材を使用する	12	196
個別の声掛け・説明を多くする	37	212
個別に記録をつける	10	191
保護者に子どもの様子を伝える	24	199
他の専門機関に相談する	29	122
他の職員に相談する	67	194
施設全体で支援のあり方を考える	34	119
保護者に実際の子どもの姿を見て理解してもらう	4	66

(3) 気になる保護者の特徴の比較

気になる保護者の特徴として示した 26 項目のうち、地域子育て支援拠点を利用する保護者と保育所・幼稚園を利用する保護者に共通する 23 項目において「とてもあてはまる」「あてはまる」と回答した者を該当有群として、子育て支援者と保育者別の回答数を比較した結果を表 3 に示した。

χ^2 乗検定の結果、1%水準で有意差が見られた。

$(\chi^2 (22) = 54.855, p < .01)$ さらに残差分析を行った結果、「いつも疲れている様子である」が支援者において、「子どもの身なりや持ち物に気を使わない」が保育者においてそれぞれ多く有意差 ($p < .01$) があった。また、「おしゃべりが多い」が支援者に多く有意差 ($p < .05$) があった。「施設や他利用者への苦情が多い」は支援者に比べ保育者に多くその差は有意傾向 ($.05 < p < .10$) であった。

表 3 気になる保護者の特徴の比較

項目	該当有群	
	支援者	保育者
「気になる子ども」を育てている	46	136
子育てに対する不安が強い	56	135
子どもを怒鳴ったり激しく叱ったりする	55	141
他の保護者とトラブルを起こす	33	68
子どもを叩くなど不適切な扱いをする	41	112
こちらの意図が伝わりにくい	56	190
子どもの身なりや持ち物に気を使わない	23	148
親自身の身なりに気を使わない	11	43
施設や他利用者への苦情が多い	24	99
子どもとのかかわりが不器用である	68	185
子どもに対して関心がない	40	125
社会人としてのマナーが身についていない	42	137
家庭内の人間関係がよくない	34	106
保護者の集団の中で孤立している	40	87
普段から表情がない	44	101
誰にでもプライベートな話をする	19	49
被害者意識が強い	34	106
いつも疲れている様子である	62	91
視線が合いにくい	34	82
おしゃべりが多い	41	73
理解力が低い	30	108
安全や衛生に対する関心が強い	15	51
会話が一方的である	25	99

(4) 気になる保護者への支援の比較

気になる保護者に対する支援 9 項目において行っているとの回答数を比較したものを表 4 に示した。

χ^2 乗検定の結果、1%水準で有意差が見られた。 $(\chi^2(8) = 53.336, p < .01)$ さらに残差分析を行った結果、「子どもや保護者の様子を見守りよく観察する」が支援者において、「子どもの様子を詳しく伝えるようにする」が保育者においてそれぞれ多く有意差 ($p < .01$) があった。「個別に話をする機会をもつ」は保育者に多く有意差 ($p < .05$) があった。また、「保護者の話をよく聞く」「他の専門機関を紹介する」は支援者に多くその差は有意傾向 ($.05 < p < .10$) であった。

表4 気になる保護者への支援の比較

項目	該当有群	
	支援者	保育者
普段からコミュニケーションを心がける	89	262
わかりやすい言葉で伝える	51	179
子どもの様子を詳しく伝えるようにする	24	231
保護者の話をよく聞く	93	250
子どもや保護者の様子を見守りよく観察する	76	158
他の専門機関を紹介する	20	40
気になる家庭の経過を記録にとる	11	52
支援の方策を他の専門機関などに相談する	22	54
個別に話をする機会をもつ	28	145

3. 調査2の考察

(1) 気になる子どもの特徴と支援の比較

「気になる子ども」の特徴として「多動・落ち着きがない」「表情がない」「かんしゃくが強い」の3項目は支援者に多く、「不器用である」「身辺自立が身につかない」「行動が遅い」「知能面での理解の遅れがある」の4項目は保育者に多い結果であった。また、具体的支援においては「視覚的にわかりやすい教材を使用する」「個別に記録をつける」「保護者に実際の子どもの姿を見て理解してもらう」「保護者に子どもの様子を伝える」の4項目は保育者に多く、「わかりやすい言葉で伝える」「他の職員に相談する」の2項目は支援者に多い結果であった。

予想1に反し、支援者と保育者には「気になる子ども」の特徴と具体的支援において差異がみられた。「気になる子ども」の特徴である「不器用である」「身辺自立が身につかない」「行動が遅い」「知能面での理解の遅れがある」の項目は、子どもの発達の

過程を継続的に理解する際に気になる特徴と考えられる。保育者は日々の保育において年齢に応じた発達過程の特徴が気になると推察される。また、「保護者に実際の子どもの姿を見て理解してもらう」「保護者に子どもの様子を伝える」といった支援は、保護者が見ていない保育中の子どもの様子を保護者に伝えるという保育者ならではの項目であると言える。保育者が気づいた子どもの特徴や園での様子を保護者と共通理解することにより、「気になる子ども」への次の支援につながるものと思われる。

支援者に多くみられた「多動・落ち着きがない」「表情がない」「かんしゃくが強い」の項目は、年齢の低い子どもを理解する上でも捉えやすい特徴であると考えられる。具体的支援において「わかりやすい言葉で伝える」が支援者に多いのは、対象とする子どもの年齢がおおむね0～3歳未満児であることや、園に在籍する子どもと継続的にかかわる保育者に比べ、支援者は、子どもの年齢や拠点の利用歴、顔ぶれも日によって異なる子どもを支援の対象としているからではないだろうか。「他の職員に相談する」が支援者に多いのは、地域子育て支援拠点では交流スペースに利用者親子と複数名の支援者がともに過ごすため、他の職員に相談する機会も多く、また情報も共有されやすいことが影響しているものと考えられる。

(2) 気になる保護者の特徴と支援の比較

「気になる保護者」の特徴については「子どもの身なりや持ち物に気を使わない」「施設や他利用者への苦情が多い」の項目は保育者に多く、子どもに対する保護者の養育態度や、園や他保護者との関係性などが「気になる特徴」となっている。「いつも疲れている様子である」「おしゃべりが多い」の項目は支援者に多く、保護者自身の様子や保護者との他保護者とのかかわりにおいて「気になる特徴」としていることが示された。拠点において保護者と子どもと共に過ごす支援者の方が保護者の様子を把握しやすい状況にあることが影響しているものと考えられる。

具体的支援については、「子どもの様子を詳しく伝えるようにする」「個別に話をする機会をもつ」の2項目は保育者に多く、「子どもや保護者の様子を見守りよく観察する」「保護者の話をよく聞く」「他の専門機関を紹介する」の3項目は支援者に多かった。

予想2では、保護者と直接かかわる時間や機会が多い支援者の方が、気になる特徴や具体的支援の項目が多いのではないかと考えたが、項目によって差

異があることが示された。具体的支援として「子どもや保護者の様子を見守りよく観察する」「保護者の話をよく聞く」「他の専門機関を紹介する」といった保護者を受容することや、必要な専門機関につなげることは支援者に多い結果であったことは、地域子育て支援拠点事業における活動の指標「ガイドライン」に示された支援者の役割²⁶⁾に合致するものであり、地域子育て支援拠点において保護者への支援が行われていることが確認されたといえよう。

IV. 総合的考察

本研究では、支援者が「気になる子ども」「気になる保護者」をどのように理解し支援しているのか、保育者による理解と支援との相違点について検討してきた。結果をふまえ両者の専門性に着目して考察を行うこととする。

地域子育て支援拠点事業は、1993年「保育所地域子育てモデル事業」が創設され、1995年に「地域子育て支援センター事業」となり、2002年に創設された「つどいの広場事業」と2007年に再編され、「地域子育て支援拠点事業」として成立し2008年に児童福祉法に規定されたものである。このような事業の成り立ちの経緯もあり、地域子育て支援拠点は、単独の施設をもつもの、商店街の空き店舗や民家を活用したものなどがあるが、最も多いのは保育所に併設されている形態である²⁷⁾。本研究においても、支援者の60.2%が保育所の勤務歴を有していた。橋本（2015）はこれまでの地域子育て支援センター事業の実態として、事業の従事者はその多くを保育士が占めることから、自らが有する保育の専門性を手がかりに事業を展開してきたと考えられると述べている²⁸⁾。そして、2012年に制定された「子ども・子育て支援法」による地域子育て支援の政策的方向性をふまえ、家庭を地域にあるがままにして支援する方向、その家庭をとりまく地域との関係を構築しながら地域資源を充実することが期待されていると捉えられる²⁹⁾としている。また、渡辺（2015）は地域子育て支援拠点における支援者の役割として、親と子どもの最大の理解者であり、日常生活における身近な「話し相手」「遊び相手」であり、地域の人と人との関係性を紡ぎだすことである³⁰⁾と述べている。

保育者の専門性について香曾我部（2011）は、現代社会が保育者に求める専門性として、子育て支援、多文化共生、特別支援、児童福祉施設との連携を挙げている³¹⁾。「気になる子ども」に対する保育者の

専門性として大塚（2012）は、たとえ〈問題行動〉であっても、子どもの思いに即して理解できる力、一人ひとりの子どもにふさわしい保育環境を設定する力、同僚・保護者・他機関の職員と協働して良い実践を構築していく力、子どもに対して行う支援と教育の意味や根拠を他者に適切な言葉で伝えられる力、研究や専門家によるコンサルテーションにおいて積極的に学べる力、発達障害等に関する知識を、実際の子どものありようとむすびつけ、支援や教育につなげる力等々が保育者に必要とされる専門性であると述べている³²⁾。

このように、地域子育て支援事業の創設の経緯も深く影響し、支援者の専門性と保育者の専門性は重複する部分もあるといえよう。特に地域子育て支援における支援者の専門性は、事業の再編や政策展開によりその確立には今後さらなる検討が必要であると思われるが、現時点においては、「子どもや保護者を理解すること」、「他機関や地域等との連携」は、支援者、保育者どちらにも共通して期待される専門性であることが明らかになった。

子育て支援者と保育者の専門性に着目し、両者の支援のあり方を考えると、支援者は保育者に比べ保護者と直接かかわる機会も多く、子どもと保護者とのかかわりを把握し親子に直接働きかける機会や経験を持つという点において、子どもや保護者が示す気になる特徴を理解し支援することが可能である。「他の職員に相談する」「他の専門機関を紹介する」といった支援が有意に多い結果から、他の利用者親子や地域、専門機関との関係性を構築するという支援者に期待される役割を担いうるものと考えられる。また、保育者は、発達過程を見守ることができるという点において、「気になる子ども」や「気になる保護者」の理解や支援を継続的に展開することが期待される。

V. 今後の課題

本調査においては、地域子育て支援拠点の職員を支援者と位置づけ調査対象としたが、調査対象者の中には、保育所におけるクラス担任と同様に地域子育て支援拠点に配属され数年で異動する者も多く含まれていた。そのため、質問紙には支援者として回答を得ているが、その専門性については、支援者として得られたものであるのか保育者として培われたものであるのかを明確にすることはできなかった。この問題については、個々の対象者へのヒアリング調査を実施することにより明らかにできるものと思

われる。

また、支援者の回答者属性において、40代が43.7%、50代が26.2%と合わせて70%近くを占めているが、拠点勤務年数は5年以上が26.7%と低い比率であり、回答者の70%以上が勤務年数5年未満、1年未満も28.7%であった。今後は、支援者の年齢層は高いが拠点勤務年数は浅い回答者属性に着目し、「気になる子ども」「気になる保護者」の理解と支援の相違点や支援のあり方について分析を進めたい。

引用文献

- 1) 厚生労働省 (2008) 保育所保育指針. フレーベル館. 4
- 2) 同上書. 31-33
- 3) 文部省 (1999) 幼稚園教育要領. チャイルド本社. 14
- 4) 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領. フレーベル館. 5
- 5) 渡辺顕一郎 (2009) 子ども家庭福祉の基本と実践 - 子育て支援・障害児支援・虐待予防を中心に. 金子書房. 6
- 6) 大豆生田啓友 (2008) 幼稚園・保育所における親とのかかわりに関する調査 - 種別の違いに着目して -. 関東学院大学人間環境学会第9号. 51-66
- 7) 鑑 さやか・千葉千恵美 (2005) 社会福祉実践における保育士の役割と課題 - 子育て支援に関する相談援助内容の多様化から -. 東北文化学園大学保健福祉学研究第4号. 27-38
- 8) 磯野真紀子・井上厚子 (2011) 「気になる子ども」の保護者への支援について - 保育園・幼稚園における事例研究 -. 平安女学院大学研究年報第12-2号. 1-11
- 9) 白石京子 (2014) 子どもの育ちと保護者支援 - 保育相談からみえる子どもの発達支援と包括的支援 -. 文教大学生活科学研究 Vol.36. 53-64
- 10) 渡辺顕一郎・田中尚樹 (2014) 発達障害児に対する「気になる段階」からの支援 - 就学前施設における対応困難な実態と対応策の検討 -. 日本福祉大学子ども発達論集第6号. 31-40
- 11) 林 優子・土田玲子・引野里絵・玉井ふみ・堀江真由美・清水ミシェルアイズマン・松田紀子・菊森美佐・内田千枝・上久保 亜紀 (2010) 尾道市の子育て地域支援システム構築にむけての支援者の意識調査. 人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌 10 (1). 55-66
- 12) 木曾陽子 (2014) 保育における発達障害の傾向がある子どもとその保護者への支援の実態. 大阪府立大学 社会問題研究第63号. 69-82
- 13) 久保山茂樹・斎藤由美子・西牧謙吾・當島茂登・藤井茂樹・滝川国芳 (2009) 「気になる子ども」「気になる保護者」についての保育者の意識と対応に関する調査 - 幼稚園・保育所への機関支援で踏まえるべき視点の提言 -. 国立特別支援教育総合研究所研究紀要第36号. 56
- 14) 上野一彦監修・酒井幸子・中野圭子 (2014) ケース別発達障害のある子へのサポート事例集 幼稚園・保育園編. ナツメ社. 26-103
- 15) 星野仁彦 (2011) 「空気が読めない」という病 - 大人の発達障害の真実. ベスト新書. 86-97
- 16) 司馬理英子 (2013) シーン別アスペルガー会話メソッド. 主婦の友インフォス情報社. 3-5
- 17) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長 (2014) 地域子育て支援拠点事業実施要綱
- 18) 星野仁彦 (2011) 前掲書. 139-140
- 19) 杉山登志郎 (2013) 講座 子ども虐待への新たなケア. 学研. 10
- 20) 金山美和子 (2014) 「気になる保護者」に関する保育者の意識と支援. 長野県短期大学紀要第69号. 167-173
- 21) 黒沢晶恵・小池遥香・城田もも・菅田美咲 (2015) 保育における「気になる子ども」とその支援について. 長野県短期大学幼児教育学科 平成26年度幼児教育学総合演習の記録第9号. 29-32
- 22) 守 巧・山崎摂史・駒井美智子 (2013) 保育現場における「気になる」姿への傾向分析. 東京福祉大学・大学院紀要第4巻第1号. 63-71
- 23) 上野一彦 (2014) 前掲書. 26-103
- 24) 星野仁彦 (2011) 前掲書. 86-97
- 25) 司馬理英子 (2013) 前掲書. 3-5
- 26) こども未来財団 (2009) 地域子育て支援拠点事業における活動の指標「ガイドライン」. 平成21年度児童関連サービス調査研究事業. 5
- 27) 渡辺顕一郎・金山美和子 (2015) 家庭支援の理論と方法 - 保育・子育て・障害児支援・虐待予防を中心に -. 金子書房. 33
- 28) 橋本真紀 (2015) 地域を基盤とした子育て支援の専門的機能. ミネルヴァ書房. 72
- 29) 同上書. 73
- 30) 渡辺顕一郎・金山美和子 (2015) 前掲書. 35
- 31) 香曾我部 琢 (2011) 保育者の専門性を捉えるパラダイムシフトがもたらした問題. 東北大学大学院教育学研究科研究年報第59集第2号. 53-68
- 32) 大塚 類 (2012) 「気になる子ども」に対する保育者の専門性 - 幼小連携における課題に着目して -. 千葉大学教育学部紀要第60巻. 179

謝辞

本調査に協力してくださった地域子育て支援拠点・保育所・幼稚園の皆様、調査依頼にご快諾してくださった自治体の皆様に心より感謝申し上げます。
(長野県短期大学 幼児教育学科)
(連絡先 〒380-8525 長野県長野市三輪 8-49-7
TEL 026-234-1221 FAX 026-235-0026)
(平成27年9月24日受付、平成27年12月1日受理)